

反障害通信

11. 5. 8

27号

天災と人災

3月11日に東北関東に地震と津波が起きました。死者と行方不明者の数の膨大さにうちひしがれていました。「数が膨大」という書き方をしてしまいましたが、そこにひとりひとりの生がありました。マスコミで報道される一端だけでも、一方通行の受け手になっているだけでも、交差するところでの押しつぶされるような思いを抱いています。実際にすべてをなくしたひと、家族や知り合いをなくしたひとのうちひしがれる思いはその一端を感じられるだけです。

被害が大きかったところは、昔から地震津波の多発地帯でした。

ですから、過去の言い伝えが生きていて、「津波てんでんこ」「命てんでんこ」（一緒に逃げようとするので、一緒に死んでしまうことになるから、ばらばらにとりあえず、自分が逃げろ）という言い伝えがあり、またさまざまな地震対策講演会などが行われ、その教で、早く、より高いところに逃げたひともあり、しかし、過去の経験から軽く見て、命を落したり、命てんでんこのおしえがあつたとしても、家族を迎えに行つたとか、目の前のひとを救おうとして流されていったひともしました。実はもっと「てんでんこ」だけではない相互関係がありました。たとえば、中学のそばに小学校があるところで、中学生が小学生の低学年の子供の手を引いてにげるとかの決まり事を作っていて、実行していたことです。そして、高校のクラブの生徒たちが「高齢者施設」のひとたちを助け出したという話も伝わっています。これについて最後でもう少しコメントします。

石原慎太郎東京都知事は「被災されたひとには気の毒だが、我欲を押し流した天罰だ」というような、意味不明なそして被災にあつたひとの気持ちを考えるととても許されない発言をしていたのですが、「我欲」とは逆のむしろ助け合っている現実もありました。

今回の天災は改めて自然の力の大きさを示し、ひとの自然の征服とか自然に負けないというところで進んできた、「科学」への過信への警鐘を示しもしていると言い得ると思います。

「想定外」発言の意味は・・・天災と人災

さて、この自然災害天災自体も決して予想されていなかったわけではありません。地震学者（石橋克彦さん etc）の警告がありましたし、脱原発を言ってきたひとの警告がまさに無視されてきたのです。

さて、天災とは別に福島原発の事故での東電職員の「想定外」発言はとても理解しがたいものです。あたかも天災かのような責任逃れのための発言をしていますが、そもそも想定を近い過去の津波の基準に合わせたということで、想定というのは、過去のものの何倍

かで想定することなのに、近い過去をそのまま基準としたという明らかな想定の誤りです（先ほど書いた石橋さんは「想定外」ということをいうだろうというところまで、想定していました）。しかも、もっとさかのぼった過去の想定をしているものを無視し、そしてさまざまな指摘、それは国会でも行われていたのですが（衆議院予算委員会での石橋克彦さんの指摘）、想定をしていたらコストが膨大になる、どこかで線引きせざるを得ないと切り捨てる国会での応答をしていた（NHKでのノンフィクション作家柳田邦男さんの指摘）ところで、プロクルテスのベッドのようなおかしい基準を作った、ひとの命よりもコストを優先させた想定に過ぎない人災とも言えることです。

ちゃんと危険性を指摘していたのに、ちゃんと対策を講じなかった議会や行政の不作為の責任を問題にしなければいけません。

そして、今回の人災がおきた後でも、まだコストという議論をしている現実もあります（これからのエネルギー問題での太陽光発電をコストがかかると切り捨てる、ニュースキャスターの発言）。コストという議論にあえてのっても、そもそも安全ということでは、原発はコストがあわないとして廃棄すべきことだったのです。そもそもコストなどという発言を許した議員たちの感性がどうしても理解できないのです。かつて、「新潟水俣病」を起こした企業が、「防止するよりも賠償ということで保障する方が安上がりだ」という発言をして問題になったのですが、コストなどという発言が、ひとの命に関わることでどうして許されるのか、どうしても分からないのです。地震が多発している日本において、そもそも原発を作るということ自体が間違いだったのです。もっといえば、地震がほとんどないからといって、フランスなどで、原発のそばに民家が建てられている風景があるのですが、そもそも原発には事故がつきもので、過去の事故の事例をとらえていくと、どうして平然としていられるのか、理解しがたいものです。管理を徹底するというところで、事故を防ぐということも幻想に過ぎません。かえって自死願望の「犯罪」といわれることを生み出していくことが起きてそのようなことは破綻してきたのです。しかも管理を徹底にするということで、かえって抑圧的な状況を生みだしています。そんな息苦しい社会をなんとかしなきゃなりません。そんな想定なしに原発を作っていくことがどうしても理解できないのです。原発とは原子爆弾を抱えて生活するようなことなのです。枕元にダイナマイトを抱いて毎日寝ているようなことをどうしてしているのでしょうか？ そもそも放射線廃棄物をどうするのか、そしてそれが地震や事故で露出するなどいろいろ考えたら、原発など作るという方針がでるのでしょうか？

かつて、「飛行機がおちても安全な原発」などと言いつのっていたのですが、明らかな嘘だと露呈しています。

わたしはそもそも原発が作られるときに、太陽光発電などの技術が出てきていて、そこへ踏み込んで行くことだったのに、コストとかいうことで、うち捨てられてきた、転換点を逃したことをきちんと総括しておかねばならないと思っています。太陽光発電で、未だにコストとか言う話がでてくるのも理解できないのです。

風評被害の責任はどこにあるのか

テレビに露出している学者が不安を押さえるというところで「安全だ、人体に影響がない」という発言を繰り返していて、政府のスポークスマンたる官房長官も、「ほとんど人体

への影響はない」をくり返していました。で、後で報道されることがそれを覆しています。避難領域の変更・拡大や、野菜の出荷自制、漁業の自粛などの処置・動きです。

風評被害にもいろいろあって、明らかにデマを流して楽しんでいる許されがたいひとものいるのかもしれませんが、主たることは、情報がきちんと提供されない中で起きていることです。その責任は主に政府や東電や学者たちにあります。

そもそも「安全だ安全だ」をくり返していたことが嘘だと分かって、どうして風評被害を防止できるのでしょうか？ 安全だと言っていたのは嘘だったときちんと謝罪し、これからきちんと情報を流していくと宣言し、実行することなしに風評被害は防ぎ得ません。

わたしは公的な責任を負うひとたちのことばがこんなに軽いことがどうしても理解出来ないのです。その発言で殺されているひとがいるのです。まさに人類に対する罪のような自体が起きているのです。テレビで「原発事故で死んだひとがいる」と原発のコマーシャルに出ていたひとが発言していたらしいですが（テレビ朝日の深夜トーク番組での勝間発言）、緊急避難地域が設定され、行方不明になったひとで捜索されないまま死んだひとのことを忘れているし、そもそもかつて原発事故で死んだひとがいるので事実歪曲だし、放射能には癌の晩発発生ということがあるという基本的なことを忘れているのです。

議論を封殺すること

もうひとつつわからないのは、「今は、原発の事故処理に集中し、その解決の後に原発の是非を問題にしよう」というような発言がでてきていることです。それで、特攻隊的に命を賭して事故処理にあたろうというような提起さえ出てきています。まるで、戦前・戦中の国家総動員体制を想起させます。そして事故処理にあたるひとたちを英雄視する観点は、まるで戦死者を英霊としてあがめるような論理になっています。

事故処理にあたっているひとたちは、地域で産業が奪われる中でそこに労働の場を見いだしていったひとたち、寄せ場などで集められた労働者のそれもまた被差別者なのですが、原子力発電の体制の中にくみこまれ、加担していったひとたちなのです。

むしろおそろしいことは、もはや原発なしには危機的状況に陥ると、マスコミは原発継続—安全策を強化しろというところを前提にした議論を始めていることがあります。今、事故処理に集中すべきだとするのなら、新しい原発は作らない、今ある原発は停止して、事故処理に集中するとすべきことです。そうこうしている間に、自民党の中で、原発の体制を維持しようという議員が動き始めています。

そもそもこれもちゃんと議論されていないのですが、今の事故処理自体が余震が続く中で、改めて危機的に陥る事があり、また他の原発も危険な状況にあるのです。

さらに事故処理は何年というスパンでしかなしえないのです。その間危険な原発を動かしかし続けるということなのです。しかも、その間にもその処理中の危険が続いていく、他の原発も危機的な状況にあると言い得ます。そもそも、多くの原発の危険性を唱えているひとが問題にしていたのは、浜岡原発です。かつて地震の想定ができない状況でつくられ、後に直下型の地震が起きるところにあるとわかった浜岡原発をとめろという決議が地方自治体議会で議決されています（清瀬市）。今頃、浜岡原発で津波対策の防御壁を何年かかけて作ろうということが進んでいるという話ですが、その間に津波がこないとまた「想定」しているのでしょうか？ 浜岡原発はまだ4・5号機が動いていて、しかも定期点検中で

とまっていた3号機を再稼働させようとしています。また分けのわからぬことをくり返しているとしかしいようがありません(この文の校正をしているときに、止めるというニュースが飛び込んできました)。原発総体が危険なのですから、すべてと言い得るのですが、少なくとも危険性が認識されているところは、停止するしかありません。今回、緊急停止が稼働した、科学の技術のすばらしさ、とかいう話をしているひとがいたのですが、そもそも停止したら危険がなくなることではない、ということが今回はっきりと露見したのです。そもそも緊急停止が働いたすばらしいという論理は、緊急停止が働くかどうかの不安があるということを行っているのに等しいことで、そんなおそろしいものをどうして維持してきたのか、根本的に考えることです。

もう一つ、おそろしいのは、インターネットの規制法案をつくろうという動きが出てきていることです。風評被害を防ぐというところで位置づけよう、利用しようとしているようなのですが、先ほど書いたように、そもそも風評被害を引き起こしているのは誰かということも押さえるなら、しかも、そしてちゃんと情報を流さないから、風評被害がおきることを考えるなら、真逆のことをやろうとしているのです。しかも、実際現行の法律の枠組みの中でも規制をかける動きがでています。このような動きが起きてくること自体がどうしても理解出来ないのです。

「がんばれ」ということの心理学的意味とナショナリズム

もうひとつ、どうしても理解しがたいことが起きています。それは災害にあったひとたちに対する禁句的なこととして、「精神障害者」や心理学的なことに関わっているひとたちからの提言があります。それは「がんばれ」とか「強くあれ」とか、安易に「気持ちがかかります」みたいなことを言うてはならないということです。いったい、実際に被害にあったひとたちとどれだけ痛みを共有化できるでしょうか？ 安易な一体感を押しつけるのは抑圧以外のなにものでもありません。それを犯して、マスコミが「がんばれ」「負けるな」とか挙げ句の果てに安易な一体感をあおる、しかもナショナリズムをあおる「がんばれ日本」とか「日本は強い」というコマーシャルのようなことを流しているのです。テレビで被災者がそのような言葉に怒っていることが出ていました。わたしは「強さ」を求める論理ということが、自然の征服というようなことにつながり、自然への素朴な畏れということを喪失したことから、被害の大きさを生み出した、単に天災ということではない、人災の側面をももつのではないかと考えていました。「強い—弱い」という論理自体を退ける必要があるのですが、あえてそれに乗っても、ひとは「弱い」からこそ助け合っていく態勢を作ってきたのではないのでしょうか？

傷ついたひとたちにはちゃんと涙する、我慢しないということがまず必要なのではないのでしょうか？ 実際避難所で寒さを我慢して体調を崩し死んでいったひともいるのです。

そんなことから「がんばれ」コールには怒りさえ、感じざるをえません。

石原都知事の天罰発言も含めて、被害者を傷つけ抑圧する発言をどうしてできるのか、なにかおかしいのです。

しかも、都知事も発言していたように、危険なものを東北に押しつけた経緯があります。首都東京と東北地方には中央の地方への収奪—差別の構造があるのです。天罰などというものがあるのなら(この場合仮定は否定ですが)、石原都知事に落ちることです。

エコロジー的運動における「障害者」差別的言辭

さて、最後にエコロジー的なところで出てくる、公害と「障害者」の関係で、「公害で障害者が生まれる」言うことと同じような内容で、「放射能被害で障害者が生まれる」という「障害者」への差別的言辭がでています。そのことにコメントしておきたいと思います。

そもそも「障害者が生まれる」という言い方自体が医学モデルに沿った表現で、「障害者」と規定される関係自体を問題にしなきゃいけません。今日差別的な関係の中で「障害者」が「障害」をもっているととらえられる中で、「障害者が生まれる」という表現になってしまうのです。なぜ、ひとの生きる「環境」自体が破壊され、生きること自体が危うくなるという話を、なぜ「障害者が生まれる」という表現にしていくのか、そこに発言者の差別的な障害観があってしまうのです。

あえて、違いが浮かびあがっている現実に乗って論じて、ダーウィン進化論批判のところで、種の多様性という議論がありました。むしろ多様性をもたない種は滅びるというような指摘もされています。だから、ある範囲で多様性をもって種は存続していることで、多様性をもって生まれるのです。そのことが自然的なこととしてもあるのです。

これらのことは、自然の流れの中で起きてくることでない、生きる「環境」自体の破壊という他者決定・強要という批判でまとめることではないかと思います。そのことは、「障害者」が歩けるようにと人体実験のような手術を受けさせられてきたことや、人工内耳手術が本人が選択する以前にほどこされている現状批判とか、バイオテクノロジーの「発展」の中で、さまざまなことが「選択させられてきている」現実を「障害者運動」が批判してきたことの裏返しだとも言い得るのではないかと言います。自然的なところで生まれる種のはばのある多様性と、種の絶滅をも引き起こす作為は区別されねばなりません。

すでに、「水俣病の胎児性患者」と言われている「障害者」が「公害」批判をしつつ、「障害者」としての自己をつきだしていく営みの中に、そのことの実践的批判と活動がそこにあるのだとも言います。

自然観自体からとらえかえす

わたしは、『科学の名による差別と偏見』などの科学批判の本を読み、科学批判をしてもいたのですが、西洋的「自然の征服」なり、「社会をつくるとは自然を改変することだ」、というような意識にとらわれていました。今回インターネットのメーリングリストで福島原発事故の情報を流してくれるひとがいて、遅ればせながら資料を読み解いているのですが、アエラの11.4.18号で「自然が与えた挑戦に対して、人間がどう立ち向かうかという戦争だ。この戦争は決して勝つことができない。というのも、人間の力では放射能は消すことはできないから。しかし、原子力を人間の生活を良くするために使おうとした人間として、決して負けてはいけない」という松浦祥次郎元原子力安全委員長の発言がでていました。

わたしたちは、自然に勝つとか負けるとか、そもそも勝つとか負けるとかという問題意識がそもそもこの競争社会の原理にとらわれているのですが、そういう論理自体が間違っていたととらえ返す必要があるのではと思います。自然の流れのなかでわたしたちは生きざるを得ないのです。

そもそも進化論の強者が生き残るという解釈が、ひとは自然の中でその自然の流に適う

ところで生きているということを忘れて、自然の征服などという過信・錯誤が原発事故を生みだし、そもそも自然に適うものではない原発を作り出したのだと言います。

そして、自然への畏れをなくしたところで、早急に避難せずに津波にのみ込まれたケースも多かったのではないのでしょうか、科学ということは自然を知り、それに適う生き方を選択していくこととして、転換していくことではないかと思います。

自然エネルギーということが、これも科学知なので、いろいろ弊害もこれから示されてくるとは思いますが、ともかく、自然の流れの中で生きていくしかない（誤解のないように書き添えれば「自然に埋没する」ということではない）、いやむしろそれが快なのだと思います。とりあえず、原子力発電所廃棄の訴えを改めて起こしていきたいと思います。コスト計算などというひとの命より、経済性を優先させてきた社会のあり方自体がとわれているのではないのでしょうか？

地域に生きる「障害者」や高齢者の生きやすいシステムなり、移住空間の問題なり、もっとこれからどうしていくか考えていく必要があります。

このことは、障害問題で言えば、移動に介助が必要なひとを日常的に（特に災害時に）どうサポートするのかというシステムの問題です。

ひとの共生の関係も組み込んだ、自然に適う共生ということなのだと思います。

「いのちでんでんこ」の教えは、ともすると、「障害者」や高齢者が放置されることにつながりかねません。今回の津波のさい、避難するとき高齢者や「障害者」をつれて、負ぶって逃げた、車でにげようとした「聴覚障害者」が強引に車から引きずり出されて、九死に一生を得たとかいう話も伝わっています（これはたまたま「うまく」行っただけで、逆に衝突する場面もあったらうし、考えられることです。手話などでコミュニケーションがとれる、地域の共同性がそこまで進んでいく必要があったのでしよう）。避難生活で、情報が伝わらない、避難所に入れないとかの問題も出ています。もっとも共生のあり方を考えていく必要があります。

共生ということが、ひととひととの共生、ひとと自然の共生、そして次世代に負の環境を押しつけないという共生として考え、それらを築きあげていくことではないかと思うのです。

最後にこの論攷の「天災と人災」というタイトルから考え直していました。地震・津波自体は天災と言えることですが、それが被害というところに結びつくのは、それをどう想定して、家を造り、街を作るのか、そして予報・予知ということでの問題も考えると、そして自然を征服するものだとして世界観がつけられ、畏怖することを忘れた中での被害の甚大さもとらえ返すと、単なる天災といえなくなります。自然ということはどうとらえていたのか、そのことを自体もとらえ返し直しています。わたし自身社会問題の中にエコロジーの問題をどう据えるのかという論理に陥っていたことを自己批判的にとらえ返し、自然の中で生きているということをきちんと押さえ直す、エコロジーをひとつの大きなテーマとしてとらえ返す、それは反差別を階級闘争のひとつの課題としてとらえているだけではだめなのということからも押さえられたこと、そのようなこととして改めて考えています。

(み)

読書メモ

フェミニズム関係の学習に入っていたところ、東日本大震災と福島原発事故があり、急遽、インターネットなどの情報や雑誌・資料を当たる中で、原子力関係の本を読んでいます。

たわしの読書メモ・・ブログ 141

・高森明『漂流する発達障害の若者たち—開かれたセーフティーネット社会を』ぶどう社 2010

「発達障害者」と言われているひとたちの抱えている課題を丁寧に書いています。「今、ここで」ということのみならず、もっとユニバーサルな形での保障のあり方を提起しています。そして「発達障害者」を軸にしていますが、広く障害ということにもつながり、そして貧困という問題にリンクする「漂流する」ひとたちの中にある「障害者」の問題をとらえようとしています。

わたしとしては、現在の保障ということがいづれにしても、競争原理を緩和する保障である限りは、スティグマを貼られた域を脱し得ないのではないか、そして保障自体も資本主義生産様式とあいられないこととして実現しえないのではないかという思いを持ってしまします。競争原理自体を覆す生活保障のあり方を探ることではないかと考えています。

それにしても、筆者は自らが「学習障害」ということを抱えさせられてきたことから、ひとにどう伝わるかということを考えてきたようで、わかりやすい文で書いてくれています。これもわかりやすい文の手本になるのではとも思っています。

たわしの読書メモ・・ブログ 142

・高森明他『私たち、発達障害と生きてます—出会い、そして再生へ』ぶどう社 2008

8人の当事者による著。

当事者たちへ、支援者へのわかりやすい提起。

1章 発達障害と出会った

2章 生きる上でのさまざまな困難

3章 私たちのサバイバル

の3章構成です。

高森さんが各章ごとに問題をほりさげ解説しています。

他の「障害者」当事者たちが自分たちの課題と解決方法を書き記していく、ひとつのひな形になるのではと思っていました。

たわしの読書メモ・・ブログ 143

・すぎむらなおみ『エッチのまわりにあるもの—保健室の社会学—』解放出版社 2011

書評として投稿予定・画策中

たわしの読書メモ・・ブログ 144

・『情況 2010年 10月号 [雑誌]特集現代中国論』情況出版 2010

加々美光行×丸山哲史「民族・ナショナリズム、改革・開放の内在的評価」

温鉄軍「新しい時期における重要問題三点」

矢吹晋×城山英巳「中国の現在」

矢沢国光「2008世界金融恐慌と中国」

土屋昌明「いま文化革命をいかに問題化するか」

中国が国家主義に陥り、ナショナリズム的なところに陥り、格差が拡大していく、改革開放という中で、「社会主義」とは無縁な文字通り国家独占資本主義になっているのに、どういうわけか、共産党を名乗り、国力をつけるという論理で「社会主義」と言いつのっている構図があります。最初は一国社会主義の防衛というところから入ったのですが、覇権的な、まさにグローバリズム的な展開に陥っています。そして投機的なところで、共産党の幹部の家族たちが蠢き、格差を広げている現実も書かれています。

周りも、そして国民ももはや「社会主義」ではないととらえている中で、裸の王様のところが、露呈したとき、どのように弾圧しようとも、矛盾は拡大し、破綻するしかないと思うのですが、・・・。

文化革命の位置などの論攷もありました。このあたりはロシアの党内闘争史—肅正などの問題も含めて、いちどきちんととらえかえしてみたいと思っています。このあたりは党派党争におけるゲバルトの行使の総括問題ともつながっているのではないかと思います。

文化的なことをパスして読みました。後でまた読み返したいと思っています。その前に『情況』の以前の中国特集や情況新書で出されている加々美さんの本も読んでみます。

たわしの読書メモ・・ブログ 145

・デビー・ネイサン／沢田博訳『1冊で知る ポルノ』原書房 2010

勧められた本です。

ポルノや売春の問題をかつてフェミニストたちは強烈に批判していました。ですが、なぜ売春をしていけないのかという反批判も出ていました。わたしの中でもきちんと整理できていなかったのですが、この本を読みながら整理できてきました。

ポルノや性的なことを仕事にすること自体が否定的なことではなくて、むしろ性的なことをタブーとすることを批判していかなくてはならないと思います。むしろタブーとすることで性が抑圧される中で「性犯罪」と言われることがおきてくること。そこで、性教育的なところをきちんとしたところで性の解放をはかっていくことではないかとも言い得ます。互いにきちんとした同意があれば一切の性のタブーなどないといいえるのではないかとも思います。しかし、そのきちんとした同意ということ自体がどのようになしえるのかの問題があります。そこに貧困とか大人の子どもに対する支配の問題で強制ということがあ

とき、強制ということがはっきりしないまでも、そこに落とし込まれていくという構図があるからです。

だから他の差別との関係も押さえたところで、現実的な対応を考えねばなりません。差別というところを傷つけられる（SMの同意的趣味のようなことをのぞけば、そこにおける強いられたということをもまた除いて）ということで、そのことはきちんと批判しきらなければいけないのですが、そこにも強いるひとたちもまた傷ついてきた構図の中で、差別そのものをなくすのではなく、こんどは自分たちが差別していく構図がそこにあるのです。

幼児ポルノや少女売春もそこに強いる、そして被害者が判断できない、できにくさがある中で、強いていき傷つけていくこととして批判することです。

ポルノが犯罪に結びつくというのは、プロレスが傷害事件を引き起こすというような論理です。プロレスをみると傷害事件がおきるというような論理です。プロレスを真剣勝負的にやっていて、けがをしないと勘違いするひとがバックドロップなどの技をかけてけがをさせることはあるかもしれませんが、あれはショーだということを理解すれば、そんなことはおきません。ポルノも同じようなことです。だから、ポルノに法的規制をかけることではなくて、問題は制作場面で強いること、傷つけるが起きることを制止することです。

ちょっと話を脱線させます。このあたりは、差別の問題で徒歩競争は差別を生み出すから、やめようとかいうおかしい論理にもつながっています。それをやめるのなら、むしろ学力テストなどを全部やめるようなことです。

スポーツがナショナリズム的なこと、排外的な差別に現在つながっている現実があるのですが、わたしはこれは自分がなにかを獲得したいとか自分を磨きたいとか言う意味で別にそれが競争するから差別的になるとは思わないのです。問題は競争原理で競争そのものが必ずしも差別になるわけではありません。

話が脱線しましたが、差別というところからきちんとひとつひとつの事象をとらえ返していくことが必要です。ポルノや売春に関してもそのようなことです。

たわしの読書メモ・・ブログ 146

・菊地夏野『ポストコロニアリズムとジェンダー』青弓社 2010

この本も勧められた本、とても刺激的な本です。フェミニズム関係の本それなりに読んできたのですが、その中でも特に印象的な本の一冊になりました。

分断をどう超えていくのかというテーマが底に流れています。

フェミニズムは、というよりフェミニズムも、性差別だけを取りあげ分断を招き寄せてしまう傾向があるのですが、民族—人種差別や、階層性の問題から性差別をとらえ返そうとしています。

そして、自由意志と強制という二元論の裏にある差別の重層構造をとらえかえしています。そこにポスト構造主義的フェミニズムの真骨頂とも言える論攷が展開されています。フェミニズムを方向付ける貴重な論攷です。

外国のフェミニストや日本のフェミニストとの対話もあります。

とくに、バトラーやコーネルの脱構築的論攷、スピヴァクの「サバルタンの沈黙」を巡る論攷、コーネルやスピヴァクまだ読んでいなかったのですが、読み込んでいきたいという思いに導いてくれました。

実践的な議論の軸になっているのは、沖縄のAサイン制度と「従軍慰安婦」の問題です。

議論を詳しく紹介しつつ、筆者自身がそれにコメントしていく、その論攷が的確、論理的なのです。しかも、ポスト構造主義的な観点が貫かれていて、とても刺激的なのです。

わたしは差異があるから差別があるのではない、差別があるから<差異>が「差異」として浮かび上がるという物象化の問題をとりあげてきたので、差別のユニバーサルなとらえ返しですごく共鳴していました。

筆者も物象化という言葉を使っています。そのあたりで、脱構築と物象化を巡る対話をしていきたいという思いを持っていました。

実はわたしの育ったところは米海軍の基地のある佐世保なので、そこにもAサイン制度があり、住んでいたところの近くでアメリカ兵とのトラブルとかも起きていたり、このあたり一度どういうことだったのか、とらえ返してみたいとの思いも持っているのですが、。。

たわしの読書メモ・・ブログ 147

・高木仁三郎『いま自然をどうみるか（増補新版）』白水社 1998

『図書新聞』が大震災・原子力発電所放射線被害の後に出した編集部の巻頭言で紹介されていた本です。

筆者は反原発運動を担っていて、そのシンボリックなひとだったひとのようです。

「エコロジー」といわれていることを自然観の問題からとらえかえし、自然の流れの中でひとが生きていくという道筋を示している、ひとの生き方を議論していく貴重な資料です。是非中学生の教科書なり副読本として使って欲しい本です。

序章でこの本のアウトラインを示しています。

第一の自然と第二の自然への引き裂かれ、第二の自然の浸食を問題にしています。16P

このあたりはわたしの中ではマルクス／エンゲルスの「社会化された自然と自然化された社会」、という概念とつながり、「自然そのもの」（第一の自然）が破壊されていくこととつながっています。

今バイオエシックスということが問題になっていますが、倫理をたてる以前の自然観自体が問題になるという提起があります。18P

科学技術を問う中で自然観自体が問題になっているという提起もあります。

これまでの自然観自体を問題にしています。第一に「自然を人間にとっての克服すべき制約だとみようとするとらえ方、第二に「自然を人間にとっての有用性と考える見方、第三に「(第二のような) 人間の自然利用は、基本的に自然の私有を前提にしている」ということ、第四に「(そのような) 自然に対する人間中心主義的な働きかけを、人間の主体性の発露と自由の拡大としてみて、進歩と自由の名において正当化した」19-20P

自然の人間との関係自体から問題にしています。簡単にまとめているところがあります。

「地球の生態系は、多様な生物の驚くほど巧みな共存の関係で成り立っている。私たちの直面する危機の多くは、その共存関係を、人間が破壊しつつあることによるものである。この危機を克服するには、人間中心の立場を転換して、人間も自然の一員として、そのバランスの中で生きていこう」 21P

そこからさらに共存という言い方を問題にして、その言い方では「環境と経済の調和」という発想になってしまう、もっと積極的に「自然との共生」として突き出すことと提起し、さらに「共生」ということではあいまいになる、問題は「人間と他の自然を対置させたうえで、その調和や共存を説く、というのではなく、自然の全体の中に人間の生や生活を相対化する、むしろそうして自然の中に生きることこそが人間の主体性である、という思想である。」さらに「人間は自然の多様な営みを知り尽くすような位置にはいない。という自己認識がある。自然の全体は、多様で巧みな生命の営みの中に、おのずからひとつの調和を保ち法則性を形づくるだろうが、それに沿う道は、それを人間の側に引き寄せることではなく、人間がその中へと合流していくことだと考える。」人間にとって最高の原理であった理性よりもさらに上の原理として、自然の営みという大きな枠組みに従うという原理をおくのである。」 22P

そして、エコロジーということの要約的提起として「人間の自然界における位置を徹底的に相対化し、それこそが近代の人間を人間たらしめてきたと考えられた人間の知性の絶対的普遍性(ないし他の自然に対する優位)という考えを放棄しようというのが、エコロジズムの本質なのだ。これは大転換であって、この考え方には抵抗感をもつ人が多いであろう。エコロジズムが独自の意味をもつのはこの点であるが、それはまた十分な批判的検討を要する点でもある。」 23P

そして、エコロジズムは解放の思想たりうるかという問いかけをしています。

エコロジズムが抱えている問題として、①人間社会の物質的基盤を脅かすことにならないか。②人間の自然的規範への従属を要求し、人間の自由と主体性を奪うことにならないか。という問いを立てています。本書では②の問いに切り詰めて、エコロジズムが往々にして社会的問題に関心を薄める傾向を指摘し、「二つの自然」の間で私たちの内部が引き裂かれた状態に陥っているのも、人間の自然的存在と社会的存在とが激しく矛盾しあうような場に、私たちがおかれているからであった。それを、いわば社会的側面を切り捨て、人間をさながら自然的存在として純化させるというのでは、しょせん人間は解放されないであろう。この点はエコロジズムにとって命とりになりかねない。」 24-25P

で、「しかし、大方の批判とは逆に、まさにこの人間の自由と解放という点にこそ、私はエコロジズムの大きな可能性をみたい。つまり、単純に自然の全体の中に人間を埋没させることとしてでなく、人間の精神を拡大なる自然に向かって解放するかたちで人間を相対化するものとして、エコロジー的な自然と人間の間を構想したい。この相対化は二元化された自然像から私たちを解き放ち、根源的な自然と人間の間を復権せしめるだろうから、それにより私たちは、より解放的で創造的な地平へと到達できるだろうと、期待されるのである。」 25P とつづき、「エコロジズムは解放の思想たりうるかどうか。数学の問題のように、この問いをたて、解こうとすることよりも、二元論に引き裂かれた自然観を統一的にとらえなおす方向で、解放の問題を考えていきたいというのが、本書の立場である」

26P と提起しています。

この序章の部分がこの本の概略、時間のないひとはここだけでも是非読んで欲しいのです。

さて、本章に入りますが、二部編成になっています。第一部は、「人は自然をどうみてきたか」です。西洋哲学の自然観を追っています。

ギリシャ神話のゼウスとプロメテウスの争いを第一の自然と第二の自然の争いとしてとらえ返しています（二つの自然と二つの神という展開 45P）。このあたり、西洋の近代知の地平では、プロメテウスを英雄視する観点が強いのですが、この争いのヘシオドスの解釈として、むしろひとがプロメテウスの火をえることによる自然と一体化して生きてきたことから踏み外していく不幸というようなところで描いています（ヘシオドスの論考は、「自然に適う労働」というところにとらえられるようです 52P）。このあたりはエデンの園の知恵の実のリンゴを食べて追われたひとの不幸とつながる話です。原子力をプロメテウスの火に例えることにもつながっています。さて、神話的世界からヘシオドスを経てギリシャ—イオニソスの文化として開き（このあたりは筆者にはギリシャ文化が奴隷制の上に立った民主主義であったという批判がでてこないのがどうも分からなかったのですが）、そしてイオニアの根源的物質をさまざまなものとしておくとらえ方（ターレスの「水」から始まる）の議論を経て、アリストテレスの形而上学として結実します。それが、キリスト教的なアリストテレス—プトレマイオスの宇宙観として中世のキリスト教的世界観にも影響していたのですが、コペルニクス・ガリレオ・ニュートンの宇宙観・物理学の地平への近代知のパラダイム転換の中で、機械的自然観へと転換し（このあたりは「〈なぜ〉と〈いかに〉の分離、〈なぜ〉の棚上げ、これこそ近代科学の成立の要件でもあったともいえよう。」112P という批判をしています）、そこからまた、アインシュタイン—量子力学的なところにパラダイム転換しています。しかし、「アインシュタイン的な意味で単純性に還元できるとしても、それは決して今というかけがえのない瞬間の、実際この世界の中で、私たちがいまそうしているように生きていくことの意味を示してくれない。私たちがいまこの自然の中でどう生きるべきなのか、を語ってくれはしない。」143P という現代科学批判を展開しています。そして、現在はニューサイエンスとして展開されることへのコメントも筆者は展開してくれています。このあたりは、エコロジー的な考え方の結論的なこととして、ニューサイエンスが西洋的近代科学の批判—「ホリスティックな自然把握と東洋的・神秘主義的・霊的な自然と宇宙の把握が、最先端の科学的根拠をもつ」としているとはいえ、「ニューサイエンスのように、現代科学主導の自然観に拘泥して、普遍合理性という点から望ましい自然観への変革を考えるのではなく、いまここにこうして生きる一個の人間のかけがえのない生と生活から出発しつつ、しかもそれが自己中心主義や人間中心主義へと閉じてしまわないような広い世界への、人間の解放として、問題を立てたいのである。」149P というような理性の普遍性・絶対性に根拠をもつ学ではなく、〈手の〉実践 144P を宣揚する結論的な展開になっています。どちらにしても西洋の知が自然の征服としての科学として進んできたことへの、マルクスへの批判も含めたとらえ方の必要という提起として結論つけられるようです。

さて、第一部は第二部で展開することの基礎学習—自然観の歴史的とらえ返しという予備作業になっているようです。筆者は第一部はパスしても良いという提起をしていて、第二部「いま自然をどうみるか」がこの本のタイトルでもあり、筆者の論攷の本格的展開に入ります。

抑圧の学としての科学を押さえる中で、しかし、「科学の独善性に対する批判をいつも備えたいうで、科学者たちから学びうることは学んでいく」158P という姿勢を示し、

エコロジーへと開いた生態学は単に生物学ではありえないと生態学のとらえ返しをなし、「単純な自然科学決定論はさまざまな問題を露呈してしまう。」162P と押さえています。

このあたりは「開かれた生命システム」164P という概念がキーになっているようです。

そのことは「開放定常系」なり、「定常開放系」という概念でまとめえるようです。167P 「人間社会は、生物サイクルの中の動物の一つの形であるにすぎない。」167P という提起がなされています。

そして、共生ということを否定する内容をもっているダーウィズム批判を展開しています。「ダーウィニズムは、人間を「進化したサル」として生物界に相対化したかにみえた。しかし、まさにそのことによって、ダーウィニズムは適応を達成した生存競争のチャンピオンとして人間を復権させてしまった。そして人間の自然に対するほとんどあらゆる行為が、生存のためのものとして正当化される土壌をつくった。」と展開し、そもそも進化ということ「共生によって互いに他を向上させあうような形」としてとらえなおそうとして提起しています。その「進化のイメージは、進化というよりは、熟成とか成熟と呼びたいものである。量的な進歩・拡大・強化というイメージではなく、お互いに相互作用しながら質的に向上し、また生存の条件を安定化させる。それは日常的な言葉でいうと、成熟するとか、熟成するというイメージに近いと思う。」176P ということになります。

そして非人間中心主義（的文化）の担い手たる民衆 182P というところへの展開になり、自然と共生して生きる民を紹介してくれています。（第6章）

生命の流れの中にいきるということを展開しています。201P このことはそのことから逸脱した公害とそれ以前にあった民衆の生を押さえる作業になっています。

さて、7章は「自然と労働」というタイトルで、筆者のマルクスとの対話が出てきて、興味深いものがありました。「マルクスにとっては「自由の国」はあくまで「必然性の国」の長い道程のかなたにしか考えられないものであった」224P とあります。要するに自然の征服というような近代知の地平をマルクスも超えていないという批判になるようです。「人間中心的な「主体としての労働」という近代概念こそが、この状況をもたらしたのではなかったか。その事情は、自然を支配制御の対象と考えた近代科学技術の自然改造が、当の人間自身の自然性への抑圧となったということとよく通じている。」230P そして、労働と他の活動との分離と労働崇拜の批判として展開されています。このあたり、わたしも労働と家事と個人的営為とされることの分離として展開していたことで、共鳴していました。

この章の最後に環境問題を重視していたポーランドの自主管理労組に関してコメントしています。労働が新しい形で展開されること、わたしは労働の廃棄と仕事化としておさえていることにそれはつながっていくのではないかと考えていました。

この本には反差別を主題にしてきたわたしからして、きわめて興味深い論考があります。それは、「反差別と自然性」ということでの言及です。「エコロジストの自然観は本来あらゆる多様性を重んじるはずのものである。自然界における諸生物の共生は、生物が多様化することによってこそ、豊に安定的に働く。人間社会にあっても多様な存在が協働的に共生することによってこそ、いきいきした有機的な社会が実現する。少数のエスニック(民族的)な集団や障害者を含めた多様な存在が、むしろその社会の自然で豊かなあり方とみるべきだろう。」252P メモをし落としていたのですが、このあたりは今西進化論の棲み分け理論における種の多様性の議論とつながっているようです。176P

さて、そこから「ナチュラルな社会」というキーワードでの展開に入ります。258P

そして、「自然をどうみるのかは、私たちがどう生き、どう運動するのかの問題」260P という実践的な運動的なことにつながっています。これ自体が私たち-内と自然-外という分け方になるのではという思いをもったのですが、これについては環境というとらえ方で更に展開されているようです。

この本には増補版がついています。初版のすぐ後に起きたチェルノブイリの原発事故を踏まえた、現在のなとらえ返しが展開されていて、刺激的な論攷になっています。

前述した、環境問題というとらえ方自体が外在的になっていると批判的にとらえ返し、地球人間問題というようなとらえ方を提唱しています。269P

「ほんとうの問題は、A、B、C、などの生産技術の問題でなくて、人間が地球に対する(「おける」と換えること・引用者)自分の営みをどうとらえなおし、今後どういう方向に向かうか、ということである。」という今日のエネルギー問題に繋がる論攷です。271P

そして、三つの共生を突き出しています。すなわち、①この地上におけるすべての生命の共生-エコロジー的共生②同時代的な、異なる地域、社会、文化、エスニシティの間の共生、いわば人びとの共生(前述したところに入っている他の差別の問題も・評者)③過去や将来の世代たちとの通時的共生、主要には将来の世代との共生。272-3P

で、未来世代との共生の問題として、許し難い不公平を未来の世代に与えることとして、①有限の天然資源の枯渇問題②現世代の排出する有害廃棄物の問題③修復不可能な環境破壊問題をあげています。272-3P

そしてオルタナティブな科学者を育てるという筆者の目標をかかげて、この本を閉じています。それは高木学校という形で展開されていたのですが、筆者は2000年に病で倒れています。

今回の原発事故できっと的確な批判を展開してくれていた、いやむしろ、それ以前に原発の見直しの運動をおこしてくれていたのではと、早すぎた死に無念な思いをいただいています。

さて、最後にエコロジー的なところで出てくる、公害と「障害者」の関係で、「公害で障害者が生まれる」言うことと同じような内容で、「放射能被害で障害者が生まれる」という「障害者」への差別的言辭がでています。そのことにコメントしておきたいと思います。

この箇所は巻頭言に引用して重複しているのですが、そのまま載せます。

これがエコロジストたちが社会問題を切り捨てるという筆者の指摘につながっています。

ダーウィン進化論批判のところで、種の多様性という議論がありました。むしろ多様性をもたない種は滅びるといような指摘もされています。だから、ある範囲で多様性をもって種は存続していることで、多様性をもって生まれるのです。そのことが自然的なこととしてもあるのです。

そもそも「障害者が生まれる」という言い方自体が医学モデルに沿った表現で、「障害者」と規定される関係自体を問題にしなければなりません。今日差別的な関係の中で「障害者」が「障害」をもっているのとらえられる中で、「障害者が生まれる」という表現になってしまうのです。なぜ、ひとの生きる「環境」自体が破壊され、生きること自体が危うくなるという話を、なぜ「障害者が生まれる」という表現にしていくのか、そこに発言者の差別的な障害観があってしまう、という話なのです。

これは自然の流れの中で起きてくることでない、生きる「環境」自体の破壊という他者決定・強要という批判でまとめうることではないかと思います。そのことは、「障害者」が歩けるようにと人体実験のような手術を受けさせられてきたことや、人工内耳手術が本人が選択する以前に親などの選択としてほどこされている現状批判とか、バイオテクノロジーの「発展」の中で、さまざまなことが「選択させられてきている」現実を「障害者運動」が批判してきたことの裏返しだとも言い得るのではないかと言います。すでに、「水俣病の胎児性患者」と言われている「障害者」が「公害」批判をしつつ、「障害者」としての自己をつきだしていく営みの中に、そのことの実践的批判と活動がそこにあるのだとも言います。このあたりもう少し論考を深めたいと思っています。

さて、最後にわたしのエコロジー的なところへのとりくみの不十分性を、今回の原発事故やこの本を読む中でとらえ返していました。

わたしはエコロジー問題をひとがいきていくための基本的条件として押さえていましたし、社会変革以前に自然破壊の中で人類は、地球は滅びてしまうといような恐れを抱いていましたが、そのことをきちんと運動的方針として示し得ていませんでした。

このあたり、むしろ資本主義を支える資本の論理からすると、決定的な「環境破壊」が明白になっていかないと、コストの論理や、「自然の包容力」などということで、ごまかされていく、資本主義を早くなんとかしないと、それこそ、とりかえしのつかないところまで「環境破壊」が進んでいこうという思いを抱いていました。

それに、筆者も指摘しているエコロジストたちの社会問題を切り捨てる傾向や赤と緑の連携というところが、得てして赤からの緑の転向の中での社会問題の切り捨てるようなことへの批判もありました。この赤の概念は結局イズム論に至りつくとは思いますが、高木さんが別の本で書いている、政治問題というようなところでとりあえず押さえておきます。

このあたり、赤が差別の問題をきちんととらえ返してこなかったところの問題ともリンクしていきます。

だから、赤と反差別とエコロジーという3本柱的なリンクしていく運動を考えていく必要があるのではと思っています。いろいろ考え、改めて自己の論考を点検させられた衝撃的な本でした。

たわしの読書メモ・・ブログ 148

・『情況 2011年4・5月号 [雑誌]特集福島原発の大事故』情況出版 2011

三つの論文

山崎久隆 (たんぼぼ舎)「福島原発事故はなぜ起きたのか」

淵上太郎 (9条改憲阻止の会)「冷却水—大容量電力福島原発は再起不能のガタガタだ」

平井憲夫「原発がどんなものか知って欲しい」

今回の大震災の際の福島原発事故、どうして起きたのか、その状況をかなり精細に報告しています。

三つ目の論文は、昔原発で働いていたひとの現場の状況の報告です。もうがんで亡くなっています。かなりずさんな、そしてそうってしまう現況を書いています。

それらを読むと、原発はそもそも事故を起こしていくものだ、廃棄しなければという思いに至ります。

たわしの読書メモ・・ブログ 149

・高木仁三郎『チェルノブイリ—最後の警告』七つ森書館 1986

何冊か高木さんの本を買い込んで読んでいます。

チェルノブイリの教訓が生きていたら、今回の福島原発事故は起きていなかった、そもそも原子力発電所はなぜ維持され続けるのかという思いを抱きました。

まずは、気になったところのメモ。

赤(高木さんの的には「政治」というような意味)と緑(エコロジー)の関係 74P

学者たちは自分の論理への固執化から事故の可能性を考えなかった 80P

チェルノブイリの場合は人為ミスということから原発自体の問題をとらえ返すことをネグレクトしたところで、人為ミスという概念のとらえ返し(福島の場合は「想定外」の自然災害ということで逃れようとしている・・・破綻している)

システム自体の問題

「求められているのは、あの装置が悪かったとか、この操作が誤りだったとかいう技術レベルの総括ではなく、巨大核技術という文明上の選択の、全面的な見直しのはずである。」

154P

核技術の問題

「核というのは、化学結合よりも百万倍も強力な力、これまでの自然界にはまったく異質な物質と原理を、まったくそれに対して備えのなかった地上に導入したのである。」180P

終わりの始まり

「したがってこれは、二重の意味で「終わりの始まり」であろう。核の脅威と決着をつける終わりとなるのか、人類の終わりとなるのか、その両者が併行的に進行していく、今はまさにそういう時代のただなかにある」192P

これからはわたしのテキストクリティーク的メモです。

科学信仰の横行

科学知というのはいま知り得る範囲の知識にすぎません。

数字の魔術ということがあります。数値というのは、最低限の被害を見積もってもこれだけあるというところで使えるだけで、複合していくことでドミノ式被害の拡大があることを押さえていません。しかも風評、分からないものへの畏れがあります。後から被害が新しく発見されていく、水俣病も水銀は海水で薄められるから大丈夫、水銀被害などないと御用学者は言いつのっていました。

今回の問題もしかりです。原子力発電所が作られていくとき、「安全、安全」と叫ばれていました。で、活断層が後から発見されて、その上に立っている発電所さえあります（浜岡原発がまさにその例）。福島も津波6メートルの設定をしていましたが、この地で起きた貞寛の地震は今回の規模であったとの指摘がもともとありました。

「津波6メートルはない」と東電の職員は断言していたとの話もあります。なぜ、ないと断言できたのか、科学的にあり得ない、そもそも「ない」の証明をいかにしえるのかということがあるのです。しかも、過去のはっきりした記録が6メートルだからと6メートルで安全設定するのは意味不明です。安全設定は少なくとも過去のデータの2倍で設定することではないかと思うのです。

「ない」と発言した科学者の責任はどうなるのでしょうか。地震ですぐ搜索活動をしたら助かったひとも含めて、この被害はどのような規模になるのでしょうか？ 刑事罰を問われるとしたら懲役何万年となることです。そして、放射能の被害は人類への罪となっていく可能性があることです。

どうも分からないのです。スマップの草薙剛は公園で裸になったとかで、活動を停止していたことがあります。気象予報士のタレントの石原良純は原発が危ないというひとは科学をとらないひとだとか数ヶ月前にテレビで言っていたのです。それなのに、平然とまだテレビに顔を出し続けています。原子力関係の専門家といわれるひとたちが「危険性はない、ほとんどない」との発言を繰り返していますが、避難地域の拡大や、摂取制限や、出荷制限が拡大していくことは、彼らの発言の軽さというか、無責任さを表していると思えません。

いまになっても、コストなどと発言しているひとがいるのですが、コスト計算の論理は目先の利益を求める資本主義の宿命のようなことではないのでしょうか（新潟水俣病での企業の幹部発言「予防するより、賠償金を払った方がやすあがり）、ひとの命とコストを天秤にかけているようなことです。そもそも原子力発電所自体が人類破滅への途へ踏み込んでいくことです。

原子力発電がクリーンなエネルギーだとしたら、「ヒットラーは人類の未来を考えて世界統一を夢見た英雄」になります。

そもそも前のブログの本で書かれていた自然観の問題があります。自然をしって自然の流れの中で生を築いていこうということでの科学を再編していくことではないでしょうか。

・高木仁三郎『核の世紀末—来るべき世界への構想力』農山漁村文化協会 1991

二部構成

一部は「核の世紀末を生きて」

ポジの部分を考え、ネガの部分を考えなかった 26-27P

二千万人の被曝者という想定

東ヨーロッパの環境破壊

湾岸戦争での核施設破壊

美浜原発事故

原発と心中 98P

二部「来るべき世界への構想力」

トータルな社会分析

①東西のイデオロギー対立の終焉

②環境問題といわれることからこの社会の価値の置き方の問題

③南北問題

いかに作るかからいかに生きるか 生産的価値から相互的価値 119P

能率と効率 123P

知識から賢さ 124P

アクティビズムからパッシビズム 127P

作ることとこしらえる（なる）の違い 128P

ベーコンの「自然の征服」概念 130P

共生型社会 141P

デカルト的切断 143P

デカルト的切断のデカルト的克服・統合というデカルト的展開の死・・自然科学のアクティビズムの問題 146P

共生の定義（技術の問題ではない）

「共生というのは本来、何々との共生ということではなくて、すべてのものが共に生きるということだと思います。これは生命を持ったものどうしのことだけではなくて、もっと広い宇宙のなかで、人間がどう収まって生きていくのかという問題だと思います。」 152P

持続可能な社会の構想

わたしのテキストクリティーク的メモ

資本（主義）の論理は目先の利害エゴイズムの社会

決定的なだれにでも分かる破壊まで突き進む資本主義社会

『イギリスにおける労働者階級の状態』での労働者の置かれていた状況と現在の「環境問題」での破壊的情况

赤と緑と反差別のトライアングルでの連携した運動の必要

・高木仁三郎『プルトニウムの恐怖』岩波新書 1981

そもそも長崎に落とされた原子爆弾の材料として作られた自然にない元素プルトニウム。その名は冥王星(ブルート=冥土の王)からきています。8P まさに、地獄の釜のふたをあける、パンドラの箱をあける行為としてあったという、プルトニウムの恐怖という本のタイトルにつながっています。

より大きく、より強くの自然征服の科学の象徴としての原子力技術。27P

「巨大科学技術は、私たちの住む社会との緊張の度合いを高めている」28P

「誤りの許されない技術」「しかし、そうやって人間から「誤り」を奪ってしまうことが、果たしてできるだろうか、できたとして、管理社会への志向は、はたして賢明なことだろうか」60P

「あの事故(スリーマイル島原発事故)の原因を「人為ミス」に求めるとすれば、それは巨大科学技術と神ならぬ人間の間の越え難い溝に気づかなかった「ミス」ではないだろうか」62P

核燃料サイクルという危機の地理的広がりを書いています。67P

核文明のジレンマ、明と暗はメダルの裏表 107P

「許容量」の論理のあやうさ 112P

科学は被害の後を追って来た・・水俣病などの例 119P・・ミネルバの鼻は夕暮れに飛び立つ

核技術は人間に抑圧的な管理社会を生み出す・・6章

巨大科学技術は専門家・細分化をもたらす、総体をとらえられない「ホモ・アトミクス」誕生 197P

今、「全体」を見通した議論の必要 198P・・これをなしえなかったことが今回の福島原発事故につながっている。

原子力発電所は結局非効率なものにしかならない、その批判をきちんとまとめてくれます。219-220P

これまでのエネルギー問題におけるハード・パスに対するソフト・パスの提言・・イリイチのサブシステムの概念に繋がるような提起

そして、「そもそも問題はエネルギーそのものでなく、より人間的な、解放された社会をどう作るか、ということにある」222P

「いま求められているのは、明日の食卓に一切れでも多くのパンを確保しようとする努力ではなく、子や孫たちの食卓をとりまく環境に思いを馳せる気持ちではないだろうか」223P

ひとは幸せとはなにかということを考えないで、ただ生産性をあげるということを追求してきた、それが自分たちの生きる「環境」を破壊していることになっているのに、いまだに、コストだとか、許容量だとか数値計算しています。根本の議論に立ち戻るべきです。

・高木仁三郎『原発事故はなぜくりかえすのか』岩波新書 2000

各章が本のタイトルの「なぜくりかえすのか」のテーマをあげての応答になっています。

1 議論なし、批判なし、思想なし／2 押しつけられた運命共同体／3 放射能を知らない原子力屋さん／4 個人の中に見る「公」のなさ／5 自己検証のなさ／6 隠蔽から改ざんへ／7 技術者像の変貌／8 技術の向かうべきところ

JOCの事故の後に書かれた本で、病床にあった筆者が録音テープに吹き込み、テープ起こしをして、できた本、まさに筆者が最後に残そうとした本です。

事故が起こる中で、安全文化の欠落ということが言われる、「けれど、そもそも安全文化というようなものが原子力の前提にあったのか。まずそういうことを疑ってみなくてはなりません。」14P という根底的といかけがあります。

原子力発電がアメリカではアイゼンハワーの「アトムズ・フォウ・ピース」という演説37P から、日本では中曽根議員の予算ぶんどりの法案を作りから 36P、国策として、ちゃんとした議論もなしに始まったという歴史を書いています。そこから、「議論なし、批判なし、思想なし」の状況で進められてきたということがあるとの指摘です。だから、原子力関係の文章には、「国家を背負う」ような意識にとらわれて、「我が国は」ということばが頻繁に出て来るという指摘があります。日本の外交官が「マイ・カントリー」などという言葉を使って他の国の失笑を買うという事態も起きているよう（アワー・カントリーということを使っても、個人が国家を背負うようなマイ・カントリーという概念は欧米人にはないという意味）66P。逆に言えば国策としてすすめられてきたからこそ、「何回も事故を起こしても本当に個人個人の責任にならない。（略）モラルというものが確立する前提がない」

その裏返しとして、今度は「日本人は、もともと西洋の科学技術を受け入れたときに、そういう意識（公益性の意識）が希薄だったように思います。科学技術の客観性の中に、最初から自己が抜け落ちてしまっ、自己抜き何か非常に冷たい客観性みたいなものが、あたかも公共性、公益性というように考えられ、それがそのまま企業のプロジェクトに結びついて、与えられた仕事を忠実にやっていたらいいというような没個性的な人間を作ってきました。企業の側も積極的にそのように人間を教育してきました。企業にはそういう側面がありました。」107P

それは教育ということでも、「理科教育がつまらないと言われているのは、結局その基本的なところがなくなって（一般教養といわれるところや倫理、要するに世界観や人間観というようなところと切れた・・引用者）没主体的な客観性というのを教えこまれるからだと思います。」108P ということにもつながっています。このあたりは、先の「技術というものの一部に人間の生命を大事にするような思想が組み入れられていないといけない」57Pの筆者の思想につながっている論攷です。

国家が公益性を考え規定するのだということとリンクした、自分で考えない、上から

おしつけられるものをそのまま受け入れるという構図は、自己検証のない自己防衛的な態度も生みだし、アカウントビリティの「説明責任」といところの責任という概念を希薄化させ、隠蔽・改ざんというゆるされないことを平気で行っていくことにもつながっていきます。そのあたりは手の技術と切れた、コンピューター上で操作するヴァーチャルな技術の進行とあいまって、危険性を認識しないまま、行動することにつながっていくという構図がうみだされます。

それはクレディビリティー・ギャップ 171P という、技術屋さんの「技術安全と国民の考える安心」のギャップがあらわれることとなります。今回の福島原発事故の放射能汚染への危険性の感覚のギャップにもあらわれています。

最後に、「(アクティビズムにとらわれない・引用者) もう少しパッシブで平和的で、大きな破綻や事故を招かないですむようなシステムを取り入れていく方向に技術というものを考えていくことが、本当に安全文化を考えることになるのではないのでしょうか。／そういう観点から、真に我われが安全に生きられる文化というのはどういう方向にあるのか、それを考えるところから安全文化というものを構築していく。そういうところまでいかないと、今のように原子力システムの安全な動かし方といった狭い範囲の中だけで、安全文化を考えていたのでは、どうもだめなのではないか、これが結論であります。」で結んでいます。180P

この本の「あとがきにかえ」で、高木さんの遺言とも言える「友へ」の文が載せられています。その最後に「後に残る人々が、歴史を見通す透徹した知力と、大胆に現実に立ち向かう活発な行動力をもって、一刻も早く原子力の時代にピリオドをつけ、その賢明な終局に英知を結集されることを願ってやみません。私はどこかで、必ず、その皆さまの活動を見守っていることでしょう。 いつまでも皆さんとともに 高木仁三郎」183P

たわしの読書メモ・・ブログ 153

・高木仁三郎『人間の顔をした科学』七つ森書館 2001

テレビでの講座や高木学校での講演・講座の記録です。

最初に「もともと科学は、「自然をよく知りたい」というひとりひとりの人間の探求心、好奇心に根ざした営みとして始まったはずです。その背景には「自然をよく知ることによって、自然とよりよくつきあいたい」という気持ちが含まれていたと思います。／ところが、近代になって、科学は単に知識を拡大する、知識を満たすという方向に発展していき、それを産業に利用する、「自然を利用する」という方向に向かい始めます。結果として、現代の科学、そしてその成果の産業への応用である科学技術の達成してきたところを見ると、かなりの分野で科学技術は巨大で極限的なものとなり、ひとりひとりの人間にとって驚異であったり抑圧であったりする面があることは否めないことだと思います。少なくとも、ふつうに生きる市民にとって科学は非常に遠いところ一手の届かないところにある印象があって、どうも人間の顔をしていないという感を否めないのではないかと思います。」34P

「両側からのあきらめの気持ち」へのコメント 32P、この筆者には、社会をよりよくし

ていきたいというエネルギーをきちんともって、おかしなことをおかしな事と言い、論をたてていく、それが宮沢賢治につながっているようです。Ⅱ部の1章。賢治の「雨ニモマケズ」という詩の生き方が筆者の生に重なっていきます

筆者にはプラトンへの思いもがあったよう、Ⅱ部の2章で出てきます。これは高木学校ということにつながっていったようです。

原子力の神話に関する細かいコメント・批判、Ⅳ部2章に出てきます。7つの神話がとりあげられています。「ほとんど無限のエネルギー」という神話／「原子力は石油危機を克服する」という神話／「平和利用」という神話／安全神話／「安い電力」という神話／「地域振興」という神話／「クリーンエネルギー」神話、わかりやすくこれからも引用されていくでしょう。

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

◆「反障害通信 27号」アップ(11/5/8)

◆三村出版本に対するオープンな批判・意見をこのホームページに掲載していきたいと思っています。とりあえずリアルなやりとりをブログでやりたいと思っています。「対話を求めて」というカテゴリを作りました。そこの「本を出版しました」にコメントという形で応答して下さい。もちろん連絡さきにメールくださっても構いません。メールをされない方は携帯に **090-9857-3431** に連絡ください。

◆ブログのタイトルを変えました。「たわしの「対話を求めて」

読書メモを軸にしていたのを、もっと自分の意見を出し対話を求めていきたいという思いからの変更です。

URLは <http://blogs.dion.ne.jp/hiroads/>

◆『図書新聞』3011号 11.4.23 に『イギリス障害学典論と経験』の書評「障害問題のパラダイム転換をなしたイギリス障害学」を掲載。

◆「障害ってなーに？」脱稿。再検討中。

お知らせ

◆ホームページは横書きのテキストファイルに近い形で作成しています。印字でうまく出ないとき、読み込めないときはメールで連絡ください。また縦2段組みで印刷したものもあります。こちらが欲しい方も連絡もらえれば、メール・郵送にてお送りします。

石原慎太郎東京都知事の暴言の構造

このひとは数々の差別発言を繰り返してきました。

「三国人」発言、「ババア」発言、そして「障害者施設」での「人格があるんですかね」発言。

およそ、政治家はそのうちの発言一つでも、失脚するところなのに、なぜか、このひとは都知事として居座り続けています。

そもそも何を言っているのか、その暴言が非論理的で理解しえないところがあるのですが、それでも何か支持されていく事の中に、わたしはファシズムの芽のようなことを感じ続けています。一度、その暴言の構造のようなどころを押さえ批判しておきたてと思っていました。で、今回の天罰発言や、原子力発電所への容認発言を通してわたしなりにとらえられてきたことをここに記しておきます。

「障害者施設」での発言

これは朝日新聞が 1999 年 9/18 朝刊で、前日都知事が「障害者施設」の視察をしたときの発言を、「ああいうひとたちに人格はあるのかね」というタイトルでとりあげました。それを、後に都知事は都議会で「発言の一部だけをとりあげ歪曲した」と批判していました(9/22 産経新聞掲載)。

視察のとき、朝日の記事以外にも産経、東京新聞がとりあげています。東京が一番詳しいので、それを引用すると、単に「あるんですかね」といっただけでなく、「医療関係者」の苦勞をとらえ返す発言はしています。

さて、そもそも何を言いたいのか、都知事は文学者として考えさせられた。結論は出していないと言っているのですが、そもそも、一人の人に対して、人格があるんですかね、などという発言がそもそもゆるされるのか、「人格があるか考える」などと言われる立場はどうなるのか、考えてみると良いのです。

そして、「考えてみる」といった結論を公にしていないようだし、その発言を撤回をしたという話は伝わっていません。

歪曲したとのことですが、自分の真意を何も語らないで、疑問形で出し放しにしたということ。朝日も、ちゃんと疑問系のタイトルにしているし、何も歪曲していません。他の発言も医療関係者の苦勞を「ねぎらっている」だけで、産経の記事によると「感じさせられたことは、人間の生きることの奥深さであり、これに携わることの崇高さだ」という意味不明の付け足しをしています。奥深さの内容について何も語っていないので、結局「人格はあるのかね」の発言を撤回していません。

そもそも知事として視察していて「文学者として・・・」などという事を持ち出すことがおかしいのです。つい最近、「作家の顔と政治家の顔」「危うい「公私のバランス」」というタイトルで朝日新聞がそのことを 11.3.22 にとりあげています。

わたしはどうも石原知事は文学には表現の自由ということがあり、政治家には自分の言動へ批判があったときに説明責任がある、だから、文学者ということで発言しておけば政

政治家としての責任や説明責任から逃れうるという、おかしな発想があるのではと思います。文学者—表現者は論理的思考というよりは感性的な指向があるとは言えますが、論理的な思考を求められないなどということはありません。ちゃんと論理的な思考をする文学者にとって迷惑なことです。

靖国参拝が問題になっていたときに、私人と公人の使い分け批判がでていました。政治家は少なくとも引退するまで政治家の立場があるはずです。文学者という立場があっても、最低限政治家という立場は引退しない限りついて回ります。文学者として発言したのだから、政治的責任などない、ということはありません。

わたしはそもそも政治の廃棄を訴えたいのですが、政治の世界の論理に乗って言えば、そもそも政治家には分からないと済まされるのかどうかの問題もあります。政治家は分からないことに軽はずみに発言することではないし、分からないですまされないことはしっかり勉強すべきです。世の中がどう動いているのか、きちんと情報更新していく意志のない政治家は引退すべきです。

結局、「後で考える」ということの後の発言はどこにも出てきませんし、発言の撤回はしていません。結局は差別発言としかとらえようがありません。

天罰発言

東日本大震災の際に、「日本人のアイデンティティは我欲にある、(東北のひとたちにはかわいそうだが) その我欲に天罰が下ったのだ」という趣旨の発言です。日本人のというからは、他の国は違うということでしょうが、むしろ日本人は我を出さない、と逆に批判されてきた歴史があります。何をもち「日本人のアイデンティティは我欲にある」という発言をしたのか意味不明なのです。今回の地震の後の避難所生活を見た他の国のメディアが、助け合うさまに驚嘆し、我慢する姿勢への不思議さを報道していました。石原知事の我欲発言とは全く逆の光景がそこにあったはずですが。

後で、知事はことばたらずだったという事で撤回しました。わたしはこれも意味不明です。何が足らなかったのか、足らなかつたらきちんと補足することです。足らずでなく、意味不明なことをいった、足らずでなく、意味不明の余計だった、論理的に破綻していただけです。

さて、我欲ということであれば、わたしは石原都知事の朝日新聞に載った原子力発電所容認発言の中にそれは現れています。

原発を東京に造ってもよいと過去に発言したことを問われて「原発というものを人間の技術で完全にコントロールできれば、どこに造ったっていいし、私はそう思いますよ。ただね、今回の福島なんかにしても、想定外のことが起こったわけ(中略)とにかく9以上のマグニチュードの地震の記録ってないんですよ」(これ自体間違いです)、これは、絶対などということはありませんという意味で、結局首都圏が地方に危険性を押しつけるという我欲そのものです。

かには自らの甲羅に似せて穴を掘るということわざがありますが、石原都知事は首都の自らの我欲から、「日本人のアイデンティティ」論へむりやりおしこんだのではと思います。

さて、この記事は、後から、結局福島も想定外だったということで、地方におしつけた

わけではないと弁明しているようにもとらえられます。このあたりは何を言いたいのか意味不明になっています。絶対はないから危険だということになれば、原子力発電所は容認できないということになります。ともかく想定外ということで免責して、これからきちんと想定しようという論理になるのでしょうか？ ですが、東電の「想定外」という発言など最初の一週間ほどで、徹底的に批判され、もう使われなくなっている状況をどうも石原都知事は知らないようです。わたしは、政治家はつねに世の中の動向に敏感であらねばならないのではないかと思います。まあ、ご意見番的などころで、基本的なところで意見を言っていく立場も必要だと思いますが、首長がそんなことでは許されることはないと思います。それに化石資源に頼るといことは限界があるという趣旨の発言も出てくるのですが、自然エネルギーの存在ができません。

もう少し発言は続きます。

「原子力というものに対して私たちが興味を持ち、それを活用しようとするのは、決して私は基本的に間違っていないと思う。」なんのことも意味不明です。考えるのは勝手です。でも実行するときは他のさまざまなことを考えます。特にリスクを。

そもそも前提として、今回露呈した危険性の中で、それを維持しようというのは、それこそ、様々な我欲のあらわれではないでしょうか？ 人の命よりもコストを優先させる資本家に奉仕しようという我欲、自己保身や体制順応的なところでやってきた「安全、安全」と言ってきた御用学者の我欲、永田町を支配する政治家の権力欲という我欲、そして、四選には出ないと言ってそれを撤回したのも、自分の名誉心での我欲のようにしかわたしはとらえられません。

そんなところで、自らも政治家の我欲で動いているかきの甲羅的移し替えにすぎないことではないでしょうか？

文学者でもあるとしたら、言葉を大切に思うのですが、そもそも天罰とは悪いことをしたひとに天罰が下るといふはなしになります。なぜ、虐げられてきた地方に災害が起きたのでしょうか、石原知事の話の脈絡から言うと、天罰が下るとしたら、我欲の中心部に落ちることです。特に石原都知事の上に。

自動販売機

節電ということで自動販売機が石原都知事のパフォーマンスのターゲットにされていました。

確かに自動販売機にはいろいろわたしも意見があります。

それに設置を巡る詐欺のようなことも起きています。いろいろ考えなくてはいけないと思います。

ですが、そもそもどうしてこんなに東京の町中に自動販売機が増えていったのかを考えて欲しいのです。

自動販売機の電源を切れとか、撤去しろと言っているひとたちは、夏の暑い中に街中を歩いたことがあるのでしょうか？ 暑い中、外で肉体労働をするひとのことを全く考えていない発言としか思えないのです。

わたしはいつからか夏に手紙を書くときに、「街全体が冷房の室外機の吹き出し口になっ

たような暑さ」という表現を使うようになっていました。

四半世紀前は都心でも、窓を開けると涼しい風が入ってきました。寝苦しさはあったけど、ここちよさもあったのです。そして、公園や建物の日陰で寝転んでいても涼しい風にふとまどろむことが出来ました。そのころ、街中を歩くと、冷房の室外機の吹き出しがあつて、そこはむっとしていたのです。それが、一軒また一軒と冷房を付けていくと、窓を開けると、ぎゃくにむっとした生暖かい空気が入ってくるようになり、街全体がむっとした暑さになっていったのです。

で、街中を歩いていると、10分も歩くと自動販売機を探すことになります。

外で肉体労働をしていると、夏場はちゃんと自動販売機のあるところを探しておきます。で、仕事の合間に飲むのです。油断すると熱中症で倒れます。こんなときに生暖かい飲み物が出てきたら、「おれを殺す気か」と叫ぶことになります。

きっと自動販売機を節電のターゲットにとりあげているひとは、冷房のきいた家から冷房のきいた車に乗って、冷房のきいた仕事場に行っているひとです。

一方、事務の仕事をしているとたちが冷房病になっていくなんてことも伝わってきます。

なんで、街全体がこんな冷房の吹き出し口のようになったのか、自動販売機が増えたのか、それを考えたら、冷房のスイッチはできるだけ入れないように、自然の暑さの中の快を求めしごとをしましよーとなります。なんてことはもうしばらくは都心では無理ですから、せめて冷房の設定温度をさげましよーということが妥当な提起ではないでしょうか？

都民の生活も知らない、論理性のかけらもないパフォーマンス発言には、もううんざりです。

このひとは、そもそも当初からパフォーマンスが好きでした。銀行に都独自の税金をかけようとしたりしていました。そして様々な差別的発言。なにかをターゲットにして攻撃し、人気取りをする、そして大衆のなにかにある差別的心性をあおっていく。これは誰かに似ているのです。それは最初資本家攻撃をして登場してきた、そしてユダヤ人、「精神障害者」虐殺をしたヒットラーのやり方なのです。

ヒットラーは画家でした。石原知事は文学者。表現者というところの出発点がありました。我欲云々を問題にするところは全体性のために我欲を捨てるという志向になるのではと思います。まさにファシズム的な発想なのです。

すでに、インターネットなどで、暴言の一覧表まで作られている状況があります。それなのに、公示日直前に力立候補表明して、四選されました。この批判をきちんとしえぬことで、ファシズム的なことに流れていく恐れを観じています。わたしもこれから粘り強く批判を続けていきます。

(編集後記)

◆地震のことで、すっかり落ち込んでいました。テレビで流される映像は、ことばで表しがたい衝撃でした。その後の原発事故、「想定外」発言を始めどうしても分けのわからない推進派の論理が、御用学者としか言いようのない学者の意味不明の発言が、どうしても理解できません。わたしは原発推進派の論理は論理以前の、国策として進められた原発体制への順応的出世主義の、金儲け主義の極で批判以前の問題だと押さえる中で、基本的なことを押さえて、細かい学習を怠っていました。反原発の姿勢は出していましたが、ことさら、運動的な展開はしないままでした。そういうことが、今日の原発態勢を容認してしまっていたと痛苦的な思いを抱えています。

◆日本は被爆国で、原子力には批判的な世論がありました。それを政・官・産・学・マスコミ一体となった世論操作で(これは朝日新聞 11.5.5 河野議員の指摘)、安全という嘘八百の様々なキャンペーンを広げ、交付金という札束で地域を買収し、原子力発電所態勢を作りあげできました。その中でマスコミの果たした役割には怒りを禁じ得ません。マスコミは総体的に原発推進派になっていると批判されています。今回の資料を読みあさる中でもそのことは明らかになってきます。アエラの 11.4.4 号で「原発推進派と反対派の平行線の議論」「どちらも従来の主張をかえない」というような記事の作り方が出ていました。どうも意味不明なのです。原発推進派の安全神話は崩壊したのですから、平行線でありようがないのです。むしろ、「そのような議論をしているときではない、国難に一致して対処すべきだ」というようなマスコミの世論操作が、反原発派の批判を押さえ込んでいます。そうこうしているうちに、推進派は推進体制の擁護に動き始めています。なんとというマスコミのていたらく、論理性も崩壊させたひどさ、もはや、草の根からの批判を作り出していくしかないとの思いを、これまで動かないでいた自己批判的のところから、思いを強くしています。

◆そういうこととしての巻頭言です。ちゃんと学習しようと読み始めた高木さんの本を読みながらの論攷です。逐一文献は上げていませんが、読書メモと合わせて読んでください。新聞のコピーやインターネットからダウンロードした情報など集めています。資料が欲しい方は送ります。連絡ください。

◆大震災のさなかに石原知事から「我欲一天罰」発言が飛び出しました。いつものように非論理的な意味不明な、しかも確実にひとを傷つける発言でした。さすがに選挙前ということもあり、反省のかけらもない発言撤回をしました。数々の差別発言をくり返していたのですが、何を言いたいのか理解しがたい非論理的な話の繰り返しでしたが、やっと、その発想が読み解けてきました。このひとの発言はファシズムの芽ともいふべきこと、芽を摘むために、これからきちんと批判していきたいと思えます。

◆新書の本、脱稿していたのですが、自然観などで見直しの必要を感じ、校正を入れています。そもそも、どうもわかりやすくというところで、うまくいっていないの思いがあり、どうしようかと迷っています。ホームページへのアップ、インターネットへアクセスできないひとには郵送配布で終わるかもしれません。

◆理論化の作業に集中していたのですが、外に向かって発言し、対話していきたいと思っています。そういう意味でブログのタイトルも「たわしの「対話を求めて」」に変えました。

少しずつ動いていきます。

反障害－反差別研究会

新しい出発に関して二項目を追加しました。

■会の性格規定

今、‘障害’という言葉ほど混乱した使われ方をしている言葉はありません。わたしたちは「障害者が障害を持っている」という医療モデルから、「障害とは社会が障害者と規定するひとたちに作った障壁と抑圧である」という「障害の社会モデル」をとらえ返し、更に、「障害とは関係性の中で、「障害者」に内自有化する形で浮かび上がる」という障害関係論への、障害概念のパラダイム（基本的考え方の枠組み）の転換を図ります。そのことを通して、障害のみならず他の差別をなくしていく反差別の理論を作り上げ、その運動に参画していきます。このホームページにアクセスしてきた方との議論の中で、ともに深化と広がり求めていきたいと願っています。

■会という名で出していますが、まだ個人発の一方的発信の域を出していません。もとより、働き掛け合いとして設定したこと。読者の皆さんが活用して頂けたら、またメーリングリストみたいな形に展開していけたらとも思っています。

■連絡先

Eメール hiro3.ads@ac.auone-net.jp

HPアドレス <http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/>